

編集後記

現代は画一化された時代だという。たしかに全国どこの駅におりても、駅前の風景は似たようなものであるし、街を歩く人々の姿にも地方色はほとんどみられなくなった。道路にはどこでも車がひしめき、家々にはテレビの映像がきらめいている。

しかし、こうした画一性は、極端にまで分業化した生産・流通過程を経て市場に送り出された大量商品およびマスメディアによる情報によって作り出されたものであり、その背後にはやはり極端にまで進行した知識・技術の専門化・細分化という現象がひそんでいる。マイカーや新幹線に乗り、テレビにみいっても、その設備や機械を一貫して生産できる者はなく、そこに駆使されている技術すべてを知る者は稀有であろう。その他の分野でも、それぞれ専門化が進み、自己の領域以外に口を出すことはきわめて難しくなっている。

このような知識・技術の専門化・細分化は、研究者の世界でも著しく、各論は述べられても概論をまとめることは困難となり、本学においても経済学総論や流通経済総論、経済政策論などは、複数のスタッフによって講義が行なわれるようになった。こうした事態のなかで、各個別の分野における研究の深化をはかるとともに、その研究が他の分野とどのようなかわりがあるかということをも、よりいっそう真剣に考えねばならなくなった。異なった分野のメンバーによる共同研究の試みや、分野をこえて参加する学内研究会が活発化しつつあるのも、研究の専門化・細分化からくる孤立状態を打破しようとする努力の現われであろうし、本論集もまた、そうした努力にこたえる役割の一端をになわねばならないであろう。そしてまた、各分野の専門化・細分化による孤立状態を打破しうる知性こそが、この現代の味気ない画一化をも拭い去る力となりうるのではないだろうか。

(R. H.)